

# 王朝文学に見る裳唐衣装束について

For Mo Karaginu costumes seen in the dynasty literature

鹿野 美由紀  
Miyuki Shikano

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

キーワード : 平安時代, 装束, 女性, 裳, 女房装束

Key words : the Heian period, Women, Mo, Nyoubou costume

## 1. 研究目的

平安貴族女性の正装である裳唐衣装束の着用実態について、王朝文学や古記録の記述から明らかにすることが目的である。

本研究では、王朝文学から裳唐衣装束着用の用例を把握する。裳唐衣装束とは裳・唐衣を着けた正装であり、袴・単・桂・打衣・表着に裳・唐衣を加えた貴族女性の正装である。当時の貴族女性が、どのような儀式・行事の折に着用し、どのような色合や文様であったかを調査・研究する。扱う史料は、平安文学作品と古記録などであり、裳唐衣装束着用を記した有職故実書も参照する。これによって、裳唐衣装束の着用実態を明らかにし、その意義を考察するものである。

貴族女性の正装は、平安時代初期の『延喜式』などによると唐風衣装の礼服であったが、平安時代中期以降になると国風文化開花とともに裳唐衣装束にとって変わられている。その代表となるのが、裳と唐衣であった。日常的には主に宮仕女房たちが常用していたことから女房装束とも呼ばれている(佐藤泰子『日本服装史』建泉社・平成四年/増田美子『日本衣服史』吉川弘文館・2010年)。女房たちが裳と唐衣を着けて宮仕したことで、裳唐衣装束は奉仕服としての意味を帯びるとともに、儀礼的要素が強くなると装飾性が増したと、村松英子「晴装束の裳を中心とした着行動様式と装飾表現効果」(『山野研究紀要』1号・1993年)に論じられている。王朝文化の爛熟とともに装飾性も過剰になり、奢侈に対する禁令などが出されたことは、『紫式部日記』や『栄華物語』などに数多く描かれている。

特に裳と唐衣は、禁色と呼ばれる許されたものにしかな着用の許されない地質・色目があった。今

回、この中の裳に着目し、用例を検討した。

裳とは、背後に長く引いた巻きスカート状のもので、後ろの腰の部分に大腰、その左右に長く引く引腰、前に結ぶための小腰をつけ、地は細い幅の布を八幅横につないで仕立てた。そして一番上に着用する上、後ろに長く引いて目立つため、刺繍をほどこしたり、銀などの飾り物を縫いつけたりして、装飾を競ったとされている。裳における禁色は『まさすけ装束抄』に、「上らうの女ぼうのいろをゆるといふは、あをいろ、あかいろのおり物のからぎぬ、地ずりのものをきるなり」と記述されている。地摺の裳が禁色であり、中臈以下の女房の使用が禁じられていた。物語用例においても、主人の着用もしくは上臈女房の着用が主であった。

しかし、裳には「地摺の裳」とは別に「摺裳」と呼ばれるものがある。これは中臈以下でも着用することができ、多くの記述で「大海」や「青海」といった模様が擦られているとされている。しかし、この「地摺の裳」と「摺裳」の明確な違いについてはいまだ明らかにされておらず、平安文学・日記・古記録からその明確な違いを明らかにしようとしたものである。



図.1 裳 (大妻女子大学所蔵)

## 2. 研究実施内容

「摺裳」とは、白地の絹または綾織物に藍や露草などの染め草で、さまざまな模様を摺り染めた裳であり、「地摺の裳」と呼ばれるものは、白地に金銀泥あるいは色を用いて摺り模様をつけた最高級のもので色聴された人しか着用できないものであると、『平安朝服飾百科辞典』（あかね会・1975年・講談社）では分けられている。しかし『うつほ物語』（小学館・『新編日本古典文学全集』・1999年）の頭注では、「地摺の裳」は「摺裳」と同義であると書かれており、また『枕草子』（小学館・『新編日本古典文学全集』・1997年）の頭注では、模様の周りを金泥や刺繍で囲んだもの、『紫式部日記』（小学館・『新編日本古典文学全集』・1994年）の頭注では、青または紫で摺ったものとしている。

現在でも皇室で用いられている裳について『十二単のはなし』（仙石宗久・オクターブ・1995年）では「地摺の裳」を、文様を型摺りしたものでその地は白の生成りであるとしている。また『装束の日本史 平安貴族は何を着ていたのか』（近藤好和・平凡社・2007年）では織文様に摺文様を加えた裳を「地摺の裳」と呼ぶとしている。

上記のように「摺裳」と「地摺の裳」の違いは辞書や解説によってまちまちであり、お互いに矛盾が起きている。

この「地摺の裳」と「摺裳」の明確な違いについて物語・日記の用例を比較検討した。

日記・物語の裳の用例から「摺り」が使われているものをそれぞれ表にまとめ、地摺・色摺・柄・材質・村摺の項目で分類した。

物語の本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）に依拠する。また、日記は東京大学史料編纂所データベース及び国立歴史民俗博物館データベースを利用した。

物語と日記の用例を比較検討すると、物語では「地摺の裳」と「摺裳」が一つの作品内で何度か出てきているのに対して、日記ではその用例の多くが「地摺の裳」であった。そしてまた、物語の「摺裳」には多くの場合、柄や材質についての記述が見られるが、日記での「摺裳」には柄や材質についての記述は見られなかった。「地摺の裳」でも同様に、物語では「唐の綾の薄物の裳」や「薄物重ねたる地摺の裳」など、「地摺の裳」の材質や着用方法に触れているのに対し、日記では「綾地摺裳」と材質が書かれているにとどまっている。また物語では色摺りなどの色の記述が見られるが、

日記には色の記述は見られなかった。着用者・場は物語用例では多く晴の場で個人が着用しているものだが、日記では五節の舞姫の装束準備としての覚書きのようなものが多い。同じ五節の用例でも、物語では女房が「青摺りの裳」を着用しているのに対し、日記では筆者やその他の人物が準備すべき五節の舞姫の装束の詳細である。「摺裳」の着用者を確認すると、仁寿の女御や親王への被物など位の高い人物の使用、また五節の舞姫の装束として準備される用例も見られることから、記述上は「摺裳」であっても実際は「地摺の裳」であると考えられるものも見られる。

物語・日記に共通するものは、着用者が下仕の場合その裳は村摺りが使用されていた。また、日記に表れた「地摺の裳」の材質は全てが綾であった。物語でも「地摺の裳」の材質に綾の記述はあったが、『うつほ物語』と『枕草子』で「薄物（羅）の摺裳」の使用が見られ、用例数としてはこちらが多い。着用者から、材質にも一定の制限があったと考えられる。「地摺りの唐の薄物に象眼重ねたる御裳」を、中宮が着用している。この用例から、普通「地摺の裳」では象眼は用いられていないことがわかる。また、中宮の着用のため、「地摺りの唐の薄物に象眼重ねたる」裳が、最高級品であったと考えられる。

しかし、日記と物語の用例の比較だけでは「摺裳」と「地摺の裳」の違いについて明確にすることは難しい。

作品	年号	日時	場	着用者	本文	地摺	色摺	柄	材質	村摺
1	御堂	長和1年	12月19日	石清水の装束準備	遠長準備	摺裳				
2	左経	寛仁1年	10月2日	五節の装束準備	経準備	摺裳一腰				
3	山槐	応保1年	12月27日	様	様	摺裳				
4	山槐	治承3年	4月9日	初齋院	女房	摺裳				
5	九層	天慶9年	10月28日	大嘗会禊	下仕	村摺裳				○
6	後二条	寛治5年	10月25日	入内装束の次第	被物師通一・大納言	摺裳				
7	殿曆	嘉承2年	12月1日	鳥羽天皇即位の儀	前齋院女房	摺裳				
8	殿曆	嘉承2年	12月1日	鳥羽天皇即位の儀	小安殿	摺裳				
9	殿曆	天仁1年	10月21日	大嘗会禊	下仕	村摺裳				○
10	殿曆	天仁1年	10月21日	大嘗会禊	下仕	村摺裳				○
11	小右	長和2年	1月26日	加冠の禊準備	様	綾地摺裳	○			○
12	小右	長和4年	12月26日	賈基元服	贈物	地摺裳(裳)	○			
13	小右	寛仁3年	11月13日	五節の装束準備	実資準備	地摺綾裳	○			○
14	小右	寛仁4年	11月18日	五節の装束準備	実資準備	綾地摺裳織物腰	○			○
15	小右	万寿2年	11月11日	五節の装束	教通一彰子	地摺裳唐衣	○			
16	小右	万寿2年	11月11日	五節の装束	教通一彰子	地摺裳	○			
17	御堂	長和5年	2月7日	即位の儀	彰子	地摺御裳	○			
18	山槐	保元4年	1月21日	宴	陪膳典侍	地摺裳	○			
19	山槐	治承3年	2月10日	向院院へ	御車	地摺裳	○			
20	山槐	元暦1年	8月28日	五節の装束準備	なし	地摺綾裳	○			○
21	後二条	寛治5年	11月17日	五節の装束準備	師通準備	綾地摺裳一腰	○			○
22	殿曆	嘉承2年	12月1日	鳥羽天皇即位の儀	前齋院	地摺御裳	○			
23	猪熊	正治1年	10月15日	五節の装束準備	為成準備	綾地摺裳一腰	○			○

表 1. 古記録における摺り技法の裳の着用

番号	巻	頁	本文	着用者	場	地摺	色摺	柄	材質	村摺
1	うつほ	嵯峨の院	368	綾の摺り裳	女房	后宮の御賀			○	
2	うつほ	吹上 上	399	綾の摺り裳	女房	花見			○	
3	うつほ	菊の裳	45	青海摺りの裳	女房	大后の六十賀		○		
4	うつほ	蔵開 上	381	綾の摺り裳	女房	九日の産養			○	
5	うつほ	蔵開 下	532	綾の摺り裳、さまざま重ね	女房	祝宴 種松夫妻からの贈物			○	
6	うつほ	様の上 上	485	青摺り、墨摺りの綾三つの裳	女房	仲忠、いぬ宮の茶室に渡る日の準備をする	○			
7	うつほ	様の上 上	496	色摺りの裳	女房	殿移りの裳宴 三日目	○			
8	紫式部		144	裳を白銀に泥して、いとあざやかに大海に摺りたる	女房(大輔の命婦)	五日の産養 九月十五日の夜		○		
9	紫式部		155	地摺の裳	色許された女房	土御門邸行幸	○			
10	紫式部		155	大海の摺裳の、水の色はなやかに、あざあざとして、腰どもは固紋	綾許された女房	土御門邸行幸		○		
11	紫式部		157	裳は例の摺裳	女房(筑前)	土御門邸行幸				
12	紫式部		187	地摺の裳	大納言の君(一日目)	新年御戴餅の儀	○			
13	紫式部		187	色摺の裳	大納言の君(二日目)	新年御戴餅の儀		○		
14	紫式部		219	例の摺裳(中略)裳の摺り	女房(小少将の君)	二の宮の御五十日				
15	栄花	月の裳	66	大海の摺裳(中略)船岡の松の緑も濃	女房	為平親王の子の日の遊び		○		
16	栄花	かかやく藤裳	303	大海の摺裳	女房	彰子入内		○		
17	栄花	はつはな	414	地摺の裳	色許された女房	一条帝、土御門邸へ行幸	○			
18	栄花	はつはな	414	大海の摺裳	色許された女房	一条帝、土御門邸へ行幸		○		
19	栄花	はつはな	446	おどろおどろしき大海の摺裳	女房	東宮、辨子、城子の有様		○		
20	栄花	御裳ぎ	334	摺裳	女房	皇子内親王衣裳				
21	栄花	ころものたま	70	摺裳	女房	堀河殿法華八講				
22	栄花	わかみづ	99	裳の有様、例のむら摺	下仕	参入準備、人々の贈物				○
23	栄花	根あはせ	377	摺の裳	女房	五節		○		
24	うつほ	春日詣	258	羅の摺裳	女御	春日詣				○
25	うつほ	内侍のかみ	195	花文綾に唐綾重ねたる摺り裳	仁寿の女御	相撲の節会 仁寿の女御の贈い			○	
26	うつほ	様の上 下	584	薄物重ねたる地摺りの裳、村濃の腰	尚侍	後落の堀いぬ宮様をおける。園院の前で等々ひく	○		○	
27	枕草子	二六〇段	411	地摺りの唐の薄物に象眼重ねたる御裳	中宮	積善寺へ行啓する	○		○	
28	紫式部		163	地摺の御裳	椅子	五十日の祝い	○			
29	寝覚	巻三	253	唐の綾の地摺の裳	寝覚の上	堀河見 火影の美形に驚嘆	○		○	
30	栄花	はつはな	418	地摺の御裳	椅子	五十日の祝い	○			
31	栄花	園合	228	地摺の御裳	威子	椅子七十の賀	○			
32	うつほ	後陸	114	菊の摺り裳	親王(被物)	相撲の遠宴		○		
33	うつほ	後陸	114	綾の摺り裳	参議(被物)	相撲の遠宴			○	
34	うつほ	吹上 上	438	摺り裳一襲	贈物 大蔵一行政の使者	行政・仲忠、吹上からの品々を人々に贈る				
35	うつほ	蔵開 上	431	唐裳、摺り裳	贈物 源中納言の北の方 二女一の宮	宴宴の準備				
36	うつほ	蔵開 下	540	綾の摺り裳	被物 御簾の中一 中納言一配る	祝宴 涼、正頼の子息たちと語らう			○	
37	うつほ	様の上 上	497	薄物の地摺りの裳	被物 品侍一蔵人	殿移りの裳宴	○		○	
38	今昔	巻第二十四	326	地摺ノ裳	贈物 御息所一少将	持着の祝いの屏風歌をよむ	○			

表 2. 物語における摺り技法の裳の着用

### 3. まとめと今後の課題

裳についての説明は、物語では着用者に重きが置かれ、日記では覚書としての側面が強い。そのため、人物説明の役割も担う物語では装飾や材質についての記述が多いのに対し、日記では材質や色については記述されない。だが「地摺の裳」の材質は日記にも書かれている。しかし日記では「綾」、物語では「薄物(羅)」と頻出する材質が違ふ。着用者から、材質にも一定の制限があったと考えられる。「地摺りの唐の薄物に象眼重ねたる御裳」を、中宮が着用してことから、普通「地摺の裳」では象眼は用いられていないことがわかる。また、中宮の着用のため、「地摺りの唐の薄物に象眼重ねたる」裳が、最高級品であったと考えられる。

また、着用者や装飾から「摺裳」と記述されている中にも「地摺の裳」と思われる用例もある。そのため、「摺裳」と「地摺の裳」が同一のものであると解説してあるものが出てきてしまったのではないだろうか。

今後、物語に表れる材質の「羅」と「薄物」が原本でどう記述されているかにより、織り方の「羅」と広義の意味の「薄物」が混同されていないかを確認し、有職故実書の記述と照らし合わせどのような装飾・材質であったか、着用者や場から「摺裳」と「地摺の裳」の違いについて明らかにしていきたい。

### 4. この助成による発表論文等なし